

# 公民科教育における『社会人基礎力』の向上 —対話型授業と発表学習から，社会参画意識を高める—

千葉県立 ○○○○ 高等学校 ○○ ○○ (政治経済)

## 1 はじめに

本校は，普通科3クラス・健康スポーツ科1クラス，学年4クラスであり，その半数以上の生徒が卒業後の進路に就職を希望している。高校生の就職率は全県的にも低く，その要因は経済状況の問題以外に，企業側からみた有益な労働力としての高卒生の減少にある（進路指導部で就職指導を担当している中で，人事担当者から近年よく耳にする）。県教育委員会が示す平成23年度「学校教育指導の指針」にある「発達の段階に応じたキャリア教育」の推進こそが，このような現状に対しての改善に繋がり，キャリア教育をいかに授業実践の中に取り入れるかが大きな課題である。国立教育政策研究所生徒指導研究センターの開発した「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み」には，児童生徒が将来独立した社会人・職業人として生きていくために必要な能力や態度，資質として，「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」の「4つの能力」を，児童生徒の成長の各時期において身につけることが期待される能力・態度などとして例示している。この「四つの能力」の育成をより具現化した形で教科・科目の指導方法に導入することが大きな課題である。また，学校から社会への移行をめぐる課題の本質としては，経済産業省の定義した社会人基礎力＝「前に踏み出す力（アクション）」、「考え抜く力（シンキング）」、「チームで働く力（チームワーク）」の「三つの能力」が問われている。発達の段階に応じたキャリアを，新学習指導要領で重視されている言語活動と発表活動を通して向上させることが，児童生徒の「生きる力」の育成であり，可及的速やかに教育活動の場において実践すべきことである。

高等学校学習指導要領にある「政治や経済などに関する基本的な理解を踏まえ，持続可能な社会の形成が求められる現代社会の諸課題を探究する活動を通して，望ましい解決の在り方について考察を深めさせる。」この実践として，「地域社会の変貌と住民生活，雇用と労働を巡る問題，産業構造の変化と中小企業」の分野を具体的な生徒の進路実現への主体的活動と授業内容に関連させて探究させることが，「人間としての在り方生き方に関する教育」であり，また前記した「発達の段階に応じたキャリア」の育成に繋がるものである。

## 2 主題設定の理由

公民科教育における社会人基礎力の向上とは，「どのような資質が必要とされるか」だけではなく，「どのような資質を培うことで社会を形成していけるのか」という見地に立つことによって，生徒が自己を社会に参画させる意識を高めることにその重要性がある。発達の段階に応じたキャリアをすすめる事とは，児童生徒自身が，将来の社会を構成していく一員と自らを捉えられるようになるという事であり，その過程で，社会人基礎力の「三つの能力」を具体的な体験活動を通して身に付けていくことにある。今回の研究は，「社会人基礎力」の向上を目指す上で，特に児童生徒の発達の段階に応じたコミュニケーション能力の育成に取り組み，「学校教育指導の指針」にある「言語活動と体験活動の充実」に資すると共に，前記した問題解決に向けた授業運営の方法を，対話型授業と発表学習の実践により充実させる事にある。対話型授業では，体験的な学習や

問題解決的な学習を重視するとともに、相互がかかわり合い学びあう活動の充実を図り、また、発表学習では、調べ学習、レポート作成、発表、要約、説明、論述などの学習活動を充実させ、言語に対する興味関心を高め、思考力や判断力、表現力を育てる。

公民科教育は単なる知識偏重教育の場ではなく、日本国民としての普遍的な人間力の構築の助長作業の場であり、それは平和で民主的な国家形成そのものの本質に繋がるものである。すなわち、今日の就労問題と大きく関わる社会人基礎力の育成は、学校教育全体の課題であり、その解決に向けて公民科教育の果たす役割は重要である。

### 3 研究の仮説

- (1) 新聞発表ノートの実践は、確かな学力のモデルである「探究」(自ら学び考える)を「活用」(知識・技能を生活場面で活用する力)に結び付け、「自ら学習する時間」として位置付ける事によって、生徒の社会的関心を深め、社会人基礎力の育成に繋がる。
- (2) 対話型授業展開(生徒に発問し、その答を全ての生徒に求め個々の生徒の発言に対して必ず対話をくり返す)による言語活動と表現活動を、「生徒が自己の経験に基づきながら学習する時間」として導入することによって、生徒の社会参画意識の向上と促進が図られる。

### 4 具体的な取り組みの概要

- (1) 新聞発表ノートの実践による社会的関心を深める工夫。  
生徒が、関心のある新聞記事を発表ノートに添付し、すべての生徒の前で自らの意見をまとめながら発表する。また、授業担当者はいくつかの発問をすると同時に解説をする。
- (2) 対話型授業スタイルの導入と全員質問の実践。(導入・展開・まとめ)この既存の授業形態を、「自ら学習する時間・生徒が自己の経験に基づきながら学習する時間・自ら継続的に学習する時間」のような発展的形態に移させる。  
展開する範囲に関連する事柄を、生徒の身近な事象に置き換え全員に質問を行い、生徒の言語活動と表現活動が、生徒と授業担当者共のスパイラルアップに繋がるものとする。

### 5 新聞発表ノートの実践による社会的関心が深まる工夫 (3年生 現代社会 132名で実施)

- (1) 確かな学力のモデルである「探求」(自ら学び考える)を「活用」(知識・技能を生活場面で活用する力)に結びつけるために、毎回の授業時間内に「生徒による新聞発表」を行う。

PDCA サイクルの評価観点に基づいた運営方法と留意点

- ① 関心のある新聞記事やネット記事を探し切り取り、発表ノートに添付する。  
【計画】自らの生育歴や将来像に関係した価値観に基づいた記事の選択が行えるようになることを高い目標とする。新聞購読の有無については事前に説明し、無購読の者には予め図書室の新聞からのスクラップを許可する。(昨年度の図書室利用者は極めて少数)  
(資料Ⅰ 生徒が取り上げた新聞記事 参照)
- ② 記事の概要をまとめ、感想や意見などを書く。  
【計画】取り上げた記事についての感想や意見を約400字程度にまとめさせる。発表時にこの文章を読む生徒が多いので、この欄に記述することが生徒の意思表示であるが、単文・少量・箇条書きなどの、稚拙のものが多くみられる。自らとその記事の問題点との間にリアルな距離感を感じられないために、意見や問題意識が持てない。反面、将来像と関連しながら医療の問題や建築の問題、ガソリンの価格や教育問題をあげる生徒も多く、この発表学習が自らの進路実現に繋がるものと考えて実践している生徒も存在する。  
(資料Ⅱ 生徒のまとめた感想意見 参照)

③ 授業中に、クラス生徒の前で発表する。

【実施】始業と同時に、発表学習を取り入れている。発表順番は出席番号順。教壇に立ちクラス全員の前で発表する。発表の姿勢について事前に評価基準を話しておくが、声量などは随時注意しながら運営する。意見や感想だけを読み上げるものが多く、声が小さく聞こえにくいものも多いが他者の発表に対しての傾聴力を育成する機会にもなる。当初は、相当の生徒が緊張し面倒くさいという感想を持つが、年間通して行う中で、彼らの発表学習に対しての意識の変化を検証する。

④ 授業担当者から関連質問を3つ以上受け答える。また、他のクラス生徒から質問を受ける。

【評価】実際の発表は、感想意見の欄を読み上げて終わってしまうのであまり効果があるとは考えられない。確かに、自ら課題を発見し発表したのだが、聞き手に理解され更にはその情報の共有に繋がらない限りは発信力の育成ではない。また、自らの発表が他者に対してどのように伝わり、他者がどのように感じているかということを理解する状況把握力の育成に繋がなければ形骸化したものになる危険性がある。発表者と聞く側とを繋げるためにはより多くの言葉が必要である。そのために授業運営者は以下の点に留意し発問をくり返す。

記事の概要をリフレインさせる。	=情報発信力
もう一度、はっきりと記事の概要を全体で把握する。	=情報の共有
なぜその記事を選んだのですか。	=課題発見力
どうしてこのような事件・事故・問題が発生したと思いますか。	=計画力
どうすれば、解決すると思いますか。	=創造力
他の生徒を指名して、発表者に質問や意見を言わせる。	=柔軟性・相互評価
質問で答えが導き出せないときは、友人を指名して助けてもらえるような助言を行い、難しい問題を全体として解決しよう心掛ける。	=ストレスコントロール力

⑤ 実体験に基づいた他者への涵養力の定着と傾聴力の実践的教育効果の向上。

【処置】自らの発表時にストレス（発信力や状況把握力の低迷によるもの）を感じたことにより、結果として他者（発表者）のストレスを自らのものと同じように捉えられるようになる事によって、ストレスと向き合う力（ストレスコントロール力）が身に付く。これにより、他者の発表に対しての傾聴力や他者の間合いへの涵養力※1が身に付く。実際の労働問題を含む社会問題は自己のストレスコントロール力や他者との折り合いの力（欲求不満抑制力）の衰退に負う面もある。いかに他者に対して涵養力を備えられるかという課題を、発表学習を通して身に付けさせるプログラムを考えている。発信力の低迷は逆に言えば傾聴力の低迷であり、他者に対しての失敗経験のみが後に社会参画への積極性を衰退させてしまっている。他者と共有できるような発表学習は成功体験であり、この繰り返しは主体性・働きかけ力のような『人間関係形成能力』を育成するものである。

※1 涵養力とは

他者の失敗や経験を自らの行動と置き換え、無理なく自然に受け入れることが出来るようになるか。児童生徒の欲求不満抑制が出来るようになるための訓練の場として用いるだけでなく、共感する経験や帰属意識を高めるものとして位置づける。

涵養力とは、自然にしみこむように養成することを自らの力として備えることであり「当たり前に見える」「普遍的な思い」として、児童生徒に定着させなければならない。

⑥ 授業担当者による解説 共通理解に繋がるキーワードの提唱。

【計画】生徒の発表が終了した後に、授業担当者からその記事に対しての解説（一般論や問題点）を行う。あらためて、生徒は個々の問題に目を向けることができると同時に発表者には更なる知識の定着や関心の深まりが助長できる。また、担当者独自のとらえ方などを自らの経験から解説することによって、実社会との繋がりを教員（一人の日本国民であると同時に生徒に写る大人）から感じ取ることが出来るような工夫を持ちたい。教員そのものが生徒にとって最も身近な大人であり意見を持つ公民であるという事実を考えなくてはならないと考えている。教員と生徒は同じ国家を形成する公民としての在り方の中では日常乖離した存在であり、両者の共通理解は教育活動におけるものからしか作られなかったと思われる。しかしながら、公民科教育の位置づけの中で積極的に授業担当者が自らを教材と位置づけながら意見を発信することも必要であり、「私はこう思うけど、みんなはどう思いますか?」といった、働きかけ力の実践対象に教員を位置づけることによって、より広義な教育機会が生まれる。

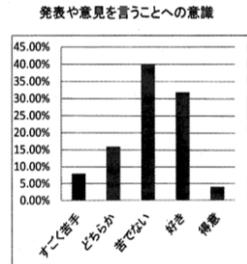
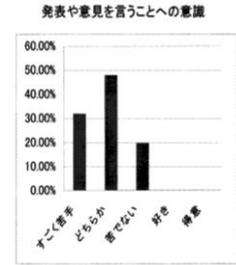
⑦ 相互学習が生徒の自発的学習活動に与える効果。

【実施】生徒が、質問するための情報をメモに取れるようになる。この作業は、学習作業におけるノートを取り方を自ら工夫し活用する能力になる。具体的なメモの取り方などは解説しないが、この能力が進学先や就職先で重要な能力として問われることをこの機会に説明する。発表内容をメモするだけ留まらずに、後に質問するための情報としてメモが取れるようになることを期待する。

(2) 発表活動の移り変わりと学習効果

〈年度初め〉

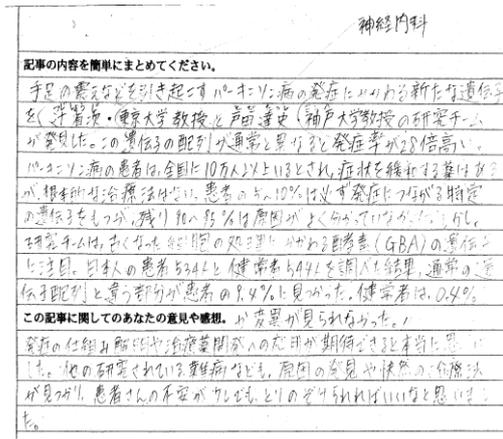
年度の初めに、生徒に対して発表や意見を言うことに対しての意識調査を行った結果、半数以上が苦手・どちらかという苦手という意識を持っていた。これに対し、年度末に同様のアンケートを行った結果、通年で行った新聞発表ノートの実践により社会問題への関心が高まると同時に、発表活動が苦ではない・好きという意識を持った生徒が増加したことが顕著に見られた。また、このような授業形態を用いるようになり、近年ますます、事前調査の段階での活用言語数が増えている傾向が見られる。「峰島先生の授業には発表がある」「発表がキャリア【自己の進路実現】に繋がる」という事が生徒間に定着して来ていると考えられる。発表時に用いる言語の意味を自ら調べ、発表時の参考として取り上げることが出来るようになってきている。これは、発表時により多くの言語が必要であると言う事を個々の生徒が認識した結果である



\*アンケート対象 平成21年度 3年生 調査科目 現代社会 132名

〈年度末〉

資料Ⅰ 生徒が取り上げた新聞記事と感想

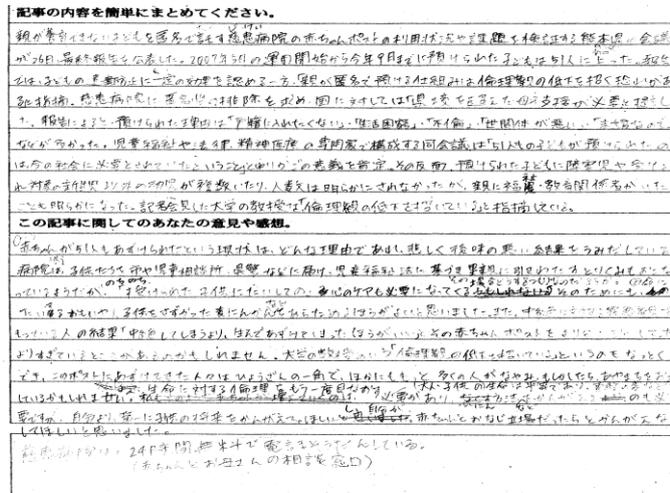


同じ生徒の二回目の発表ノートの文書を見比べると、二回目には発表に関する事前調べが十分にできており、発表作業に関してのプランニングが前回の物より発達していることが見られ、意見や感想についても主体的な自らの意見が多く述べられている。

このことから、「自ら学習する時間」の定着が図られていることが確認できる。

読売新聞 平成21年5月13日から

資料Ⅱ 生徒が取り上げた新聞記事と感想



「Baby Klappe」  
中世ヨーロッパは、貧乏者の聖に扉が  
付いていて親が子供を置いていくな  
場合赤ん坊の扉の中に入れて預ける仕  
組みになり、貧乏院で赤ん坊を養  
てきた。歴史がある。2000年、Baby K  
lappeの扉が壊れて親が育ちない赤  
ん坊のために「Baby Klappe」とい  
うのが作られた。赤ん坊を預かる  
赤ん坊の間にBaby Gateに反り、現在  
Baby Gateで70%以上はBaby K  
lappeが設置され年間40人程の赤ん  
坊が預けられているそうだ。

読売新聞

平成21年11月29日から

【字数と時間】	記事のまとめ・事前調査	感想部分	発表時間
1回目	263文字	95文字	5分40秒
2回目	469文字	493文字	9分30秒

6 対話型授業スタイルの導入と全員質問の実践。(導入・展開・まとめ)の既存の授業形態を、「自ら学習する時間・生徒が自己の経験に基づきながら学習する時間・自らが継続的に学習する時間」のような発展的形態に移させる。

(3年生 選択 政治経済 26名で実施)

単元名 労働問題と労働関係の改善

単元の目標

- (1) 資本主義社会における資本家と労働者の存在と、その力関係を理解させる。
- (2) これまでの日本の労働市場と、現在の雇用制度の変化を理解させる
- (3) 雇用情勢の変化について、その現状と問題点について理解させる。

単元の指導計画 (全体2時間)

- (1) 労働基本権の確立 1時間
- (2) 今日の労働問題 1時間 (本時)

本時の目標

- (1) 我が国の雇用事情の変化をふまえ、これからの雇用の在り方について考察させる。
- (2) 終身雇用と年功序列型賃金をもたらした所属企業への帰属意識を理解させる。
- (3) 帰属意識の薄れこそが社会参画の減退要因であることを洞察させる。

本時の展開

	学習項目及び内容	指導内容	評価の観点
自ら学習する時間 10分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 新聞感想発表</li> <li>【毎時、生徒一人に新聞などからの記事をまとめさせて全体の前での発表学習を行っている】</li> <li>・ 公民的資質の向上において最も大切なことは、自らの問題として社会を捉えることである。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生徒が関心のある記事を毎回まとめて発表する。</li> <li>・ 発表内容に対して担当者が発問や解説を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 問題を自らのものと捉えて考えることが出来ているか。</li> <li>・ 全体に対してわかりやすく説明発表が出来ているか。</li> <li>・ 生徒の発表に対しての指導側からの設問が適しているか。また、発表後の解説が生徒の問題意識の向上に繋がったか。</li> </ul>
生徒が自己の経験に基づきながら学習する時間 30分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 雇用事情の変化</li> <li>・ 終身雇用制度</li> <li>・ 年功序列型賃金 (発問1)</li> <li>『大原高校の好きなところは何か?』</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 終身雇用制と年功序列型賃金が所属企業への帰属意識を高めていたことを認識させる。</li> <li>・ 帰属意識とは、所属する集団への意識の程度のことであることを認識させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 雇用事情を認識できたか。</li> <li>・ 帰属意識を理解できたか。</li> <li>・ 自己の帰属意識について考えることが出来たか。(学校への帰属意識)</li> <li>・ 発問に対して的確な答えを導き出すことが出来たか。</li> <li>・ 自らの帰属意識について考えることが出来たか。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 終身雇用制度の崩壊</li> <li>(発問2)</li> <li>『終身雇用制度の問題点とは何か?』</li> <li>1990年代以降の経済の減速・低成長と企業間競争のグローバル化、雇用情勢の変化の関連性を理解させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>企業格付けでも終身雇用制度がマイナスであることを洞察させる。</li> <li>・ 「成果主義は競争を、年功序列は非競争を」というイメージ以外に、正当に評価されたポスト制度について解説し、企業が規模を拡張することに目標を持っていたことに触れる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ バブル崩壊後の雇用情勢の変化が理解できたか。</li> <li>・ 発問に対して終身雇用制度の問題点を洞察することが出来たか。</li> <li>・ 企業規模の再構築が労働市場をも変化させたことが理解できたか。</li> <li>・ 他の生徒の意見を聞き、相互評価が図られたか。</li> </ul>
自らが継続的に学習する時間 10分	<ul style="list-style-type: none"> <li>就業機会の低迷</li> <li>・ 男女雇用機会均等法</li> <li>・ 労働市場の流動化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ バブル経済崩壊後のリストラ等の雇用調整による、雇用不安の拡大を理解させる。</li> <li>・ 就労形態の多様化と労働市場の流動化について、最近の状況を説明する。</li> <li>・ フリーター増加の背景とその問題点について考えさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 労働市場を取り巻く多くの問題点に目を向けることが出来たか。</li> <li>・ 自らの問題として社会参画、就労を考えることが出来たか。</li> <li>・ 新たな労働市場の一員として自己を捉える事が出来たか。</li> </ul>

## (1)対話型授業の実践としての全員質問の導入。

政治や経済について考察した過程や結果について適切に表現する能力と態度の育成が必要とされる中で、生徒個々の発語表現の力が非常に弱まっている。これは、結果としてコミュニケーション能力の欠如に繋がり、「相手が何を考えているのか分からない」といった公正な判断力の妨げにもなる事態を発生させる危険性がある。実際に、《高校を卒業して就職する人にどんなことを期待していますか》と企業の経営者に尋ねたアンケートでは、第1位 コミュニケーション能力 77.3% 第2位 基本的な生活態度 65.3% 第3位 人柄 パーソナリティー56.0%（東京経営者協会・平成21年度・高校新卒者の採用に関するアンケート結果）という結果が出ている。公正な判断力の妨げは社会構築の根幹を揺るがすものであり、現実には若年層の雇用問題等で影響が現れている。この問題点を改善するため、公民科教育の実践の一つとして、生徒に発言しやすい環境を整備しながら個々の能力を向上させる事を目標として、全員質問を導入した。

### ア 全員質問の実践

1つの発問に対して生徒全員に答えさせるといった単調なプログラムである。単調だが、個々の発言に対して授業担当者がフォローアップすることにより生徒の発言意欲を高め、また傾聴力を向上させることで公正な判断力の育成が期待できる。稚拙な答えや「わかりません」という本質的に無関心から発する責任回避的な発言を出来るだけ少なくさせることにより、生徒の変容を促したい。上記の授業展開の中では、導入的発問と本質的発問の計2回、全体質問を展開した。

#### 全体質問Ⅰ 導入的発問

発問1「大原高校の好きなところは何ですか？」

発問の意図とねらい＝帰属意識の向上

就労問題は、働く側と雇う側の両者の立場から考えなければならないが、共に重視しなければならない事が、就労場所（企業）に対しての帰属意識である。年功序列賃金や終身雇用制度等の背景には帰属意識という精神的な要因が関与している。中途退職者やニート・フリーターの増加は帰属意識の希薄化と密接な関係があり、早期からの自らの帰属集団への意識付けが必要である。そこで、就労問題の本質として、自ら学ぶ学校への帰属意識を問うことを、この授業範囲における全員質問の課題と設定した。また、発問設定の段階で、想定できる生徒との対話とフォローアップを具体的に準備しておく必要がある。

#### 生徒の発言に対するフォローアップ

三年間ですごく変わる	就職率の高さや進路決定率の高さを検証
指導の成果が見える	具体的変容の姿を先輩に投影する
三年生の夏休みの指導がすごい	先輩の進路活動を解説する
体育祭	個々の活躍ぶりを思い返す
ドッジボールで楽しめる	レクリエーションの重要性に気付く
制服かわいいしミニスカートがない	他校との制服の着こなしを検証
ヤンキーがいないし粗暴な振る舞いがあまり無い	民主的社会の実証
部活動がさかんで顧問と選手の信頼関係がある	部活動の活動状況を説明
怒る先生と慰める先生がいる	社会構造について
トイレが綺麗でドアに穴があいてない	暴力社会の抑制と環境整備の努力
ガムの吐き捨てがない	美化意識の向上

## 全体質問Ⅱ 本質的発問

### 発問2 「終身雇用制度の問題点は何ですか？」

発問の意図とねらい＝主体的参画意欲の向上と前を向く意欲の育成

「終身雇用制度の問題点」という発問の前に、「あなた自身は、どのような雇用形態を望みますか？」という現実につながる問題点を解説した。このことにより、自らの雇用に対する主体的な考え方の基に現象を捉えられるようになっている事と同時に、発問へ積極的かつ具体的な意見が活発に出る様に助言したい。

#### 生徒の発言と授業担当者との対話例

年をとるとお金がかかるから昇給がいい  
勤続年数を評価してほしい  
年取ると肉体労働できないから安くていい  
ベテランは大切だ  
成果主義の方がいい  
やっぱ先輩はそれだけで偉い  
なんか滅私奉公みたい  
安定しているから終身雇用がいい  
若い人の転職とか離職が多いのはなぜ  
公務員を志願している理由がそれだから  
先生も終身雇用でしょ

養育費とか子供にお金かかるよ  
そうだよ、続ける事が大事だよ  
同じ仕事する訳じゃないんだ  
職人とかはやはりベテランがいいよ  
自由な競争はこれでいいのかも  
あなたは、自分の部活の先輩を尊敬していた  
日本の雇用形態って昔の武士と殿様みたいだよ  
いい学校出ていい会社に入るのが戦後日本の基盤だよ  
元々、一生そこで働こうなんて考えてないのかな  
公務員は急に給料上がらないけど年功序列給料ですよ  
そうです、定年まで雇ってもらえるよ

#### イ 発問時の留意事項

- ① 発問は全員に行い、生徒個々の意見を取り上げるために担当者は机間巡視しながら発言する生徒の傍にまで近づいて生徒の言葉を聴く。
- ② 生徒の発言を再度大きな声で全体に伝える。情報の共有と発言生徒に対する、オウム効果としての共感性の助長に努める。
- ③ 率直な感想や自らの意見を、すべての発言生徒に返す。
- ④ 同じ答えが出始めたら、見方を変えた例や先に違う答えが出るように発問の仕方に工夫する。
- ⑤ 「わかりません」とか黙ってしまう生徒には、少し時間を与え、最後に聞くからと声をかけて次の生徒に進む。
- ⑥ あくまで正解を求めるものではなく、生徒と授業担当者のコミュニケーションの場であり、更には、他者と共に学ぶ機会の提供であるから、生徒個々の発達の段階に応じた発言や行動に対しての指導が必要である。
- ⑦ 発言した生徒に対しての周りの生徒の反応に注意を寄せ、関連した事柄への他の生徒の談話や言葉を取り上げ、より共感的理解に繋げる。
- ⑧ 生徒の発言を妨げる様な、他の生徒の行為を取り除く努力を怠らない。

#### (2)生徒が自己の経験や体験に置き換えて授業内容を学習する

##### ア 「わかります」から始まる授業

全員質問は、生徒が自らの経験や体験に置き換えて物事を理解できるようにするプログラムである。発問に対して、すべての生徒が発言するか否かには関わらず、必ず自己を振り返ることによって「答えを導き出し、答えを持つ事」が出来る。結果として授業中の生徒は、「わかりません」では無く「わかります」からすべてに取り掛かり始める事になりうる。

##### イ 自分の答え(解)を持った経験がない

生徒は、学習定着度によって自らの中に明確な知識や理解を持ちえない状態に陥る。この状態は、個々の生徒の学習作業を不安定なものにし、また、この学習定着度の格差が全体としての授

業運営上の最大の問題となっている。そこで全員が答えられる状態を作ることが授業運営上問題となる格差を無くす手段ではないかと考えた。方法として、生徒の自らの経験や体験が解となる発問を取り入れ、すべての生徒が自らの内に経験や体験に基づいた明確な知識や理解を持つことができるようにした。今まで、学習活動において不安定だった生徒は、解を持つことによって安定して授業に参画できる事になる。また、この解は、生徒個々に違いがあっても当然であるため、すべてが正しく、そこに知識や理解の差は生じない。

### ウ 自分の答え(解)を持てた

自らの経験と体験に基づいた解を持ちえた生徒は、その知識と理解を深めようという関心・意欲・態度に変容する。その中で授業担当者の例として取り上げる経験や体験を聞きながら、生徒は自らのものと比較し考察するようになる。「この先生は、こういう意見を持っているのか」「私も、同じような思いをしたことがある」などの共有的・共感的理解が深まる。生徒が授業担当者の発言に耳を傾ける（聞く態度）事が出来るというだけで、発達の段階に応じたキャリア教育である。

### エ 発言するチャンスと機会

授業担当者は、机間巡視しながらすべての生徒に近づき個々に発問をくり返す。この状態は一人の生徒対教師という個別の教育環境である。この個別の状態を確立することによって、生徒は平等に安心した発言するチャンスを持つ。「言語活動と体験活動」が、「生徒が授業担当者に対して自分の意見を言えた」という行動によって繰り返される。発問を受けた生徒が、周りの生徒や雰囲気気を遣いながら緊張状態に陥ることなく、授業担当者に対して発言ができるように働きかけることが、この段階での重要な留意点である。

### オ 自分の答え(解)が認められる喜び

授業担当者は、生徒が発した言葉に対して必ずフォローアップすることが必要である。対話をすると言う事は、相手の言葉に対し自分の思いや意見を述べることである。この段階では、授業担当者が生徒の立場や想いに立ち、生徒が発した言葉に対しての共感的言葉をかけ続ける。「そうだね」「私もそう思う」「いいね」「みんなもそうだろう」このような言語を使い続けることによって、誰一人否定されない環境が整備される。また、運営上の方法であるが、特に取り上げるべき発言や本質的な授業運営に広がるような発言があった場合は、担当者は教壇に戻り、その内容についての深い解説を行う。一生徒の発言が全体にとりあげられ共感的に理解されることにより、その発言内容は、さらに深い経験や体験に基づいたものになる。この状態が連続することで、発言した生徒とのフォローアップが全体の生徒との繋がりの段階にスパイラルアップする。

### カ 意見を否定されない雰囲気づくり

発表学習や対話型授業のような言語活動をともなう授業運営の中で最も重要なのは、生徒が安心して発言できる環境づくりである。生徒が発表しやすい環境と一概に言うが、果たしてどのような状態なのか、またどのような工夫が必要なのか、教育の現場において重要な課題であり、深めれば人権教育に繋がるものでもある。安心して発言できる環境とは、言語活動が安定した学習作業の延長線上に位置するものであり、その活動だけが特化してはならない。いわば、特別な学習活動ではないと言う事を、生徒が認識することが大切である。普遍的な学習活動の一つととらえ、生徒の発言を揶揄したり、発言に関係のない私語は禁止することを徹底した。

## キ 傾聴力の向上による涵養力のめざめ

一人の生徒と教師の対話と、そこで生じた対話を教師と全体の生徒との対話に広げる段階までに十分に時間をかけることが重要であり、一学期の大半はこの作業の繰り返しとなる。二学期以降、生徒は一樣に、他者の発言に自然と耳を傾けられるようになり、一人の生徒と教師の対話が、全ての生徒の共有的・共感的対話として繰り返されるようになる。これは、前述した涵養力が対話をくり返すことによって個々の生徒に身についたと言える。また、生徒は「政治経済の授業には、毎回発問がある」「自らの意見を言わなければいけない」という意識が定着すると同時に、「友人の意見が聞ける」「話が面白い」といった、主体的な参画意欲も持てるようになった。

## ク 関心が深まるから知識・探求の学習意欲が高める

「大原高校の好きなところは何ですか」という発問に求める解は、自分が参画している社会に対しての帰属意識に気が付くことである。すべての生徒は、本校において学校行事や部活動、友人との交流など様々な経験と体験をした。その中でも本人にとって楽しい経験から思い起こせる好きなところとは、本人にとっての解であると同時に、正に社会参画から培った帰属意識そのものである。今回の学習单元では、生徒が将来所属する新たな集団に対しての帰属意識を、現段階で意識できるようになることであり、生徒自身の知識・探究の学習意欲が高まることになる。

対話型授業においては、全ての生徒からそれぞれに解が存在し、そして言語として他の生徒がその解を共有し理解する。いつしか関心は自らの解へだけでなく、他の生徒にも向かい、それは、図るところ学習活動の延長線上にある学習テーマへの意欲・関心・態度を高めるものになる。

## ケ 対話型授業における、人間関係形成能力の向上に繋がる授業の環境づくり

自分の意見に責任を持つという事は、他者に対しても涵養な姿勢を身につけさせたい。授業担当者の質問に「わかりません」と言うだけですべてが済んでしまう様では、人間関係が形成されていないという事である。どのような稚拙な答えであっても、意見を発するという作業が重要なのである。自らが発する言葉が、他の生徒の新たな世界観の広まりや探求意識を深めることにつながる事が可能であれば、それは言葉を発した生徒にとってとても魅力的でかつ強い学習意欲を伸ばす要素として位置づけられる。個々の生徒の自己啓発能力がとても弱くなっている中で、生徒の内なる知識や思考を発語作業により、共有的・共感的に広げることにより人間関係形成能力が向上するものと言える。

対話型授業に於いて最も重要なのは、その運営が、生徒と教師・生徒同士の共有的・共感的な空間と時間となり得ているかという事である。授業中の空気・雰囲気そのものが学習活動の評価そのものである。生徒が発言しやすい環境とは、周りが茶化したり否定するような行為が無く、また個々の意見に耳を傾け、更には共感し受け入れてもらえる様な状態でなければならない。この状態を作り上げることが授業運営の目標であり、個々の生徒の社会参画意欲が高まることによるのみ円滑な運営ができるようになる。生徒は、自らの経験や体験に基づいた意見を述べられる環境を共に築き上げることによって、個々の社会人基礎力を高め、同時に社会参画意欲を高めるものとなる。これこそ、人間関係能力の向上である。



対話型授業の実践風景

### (3) 評価方法の明確化と具体化について

社会人基礎力のそれぞれの能力についてできるだけ具体的に評価基準を設け、個々の生徒の発達の段階に応じた目標を設定する必要がある。生徒のどの能力をいかに効果的に伸ばすかを実践するためには、明確な評価が最重要である。生徒自身も、進路活動において自らのどのような部分が評価されるかということがあまり理解できておらず、社会で必要とされる能力が如何なるものかということが把握できていない現状の中で、正当にかつ分かりやすく自己を評価されることが個々の成長に直接的に繋がる。新聞感想ノートの発表時における評価基準を、以下のように設定する。また、この評価基準は学習指導における「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」の分野を網羅するものであり、社会人基礎力のみを評価する基準であってはならない。上記の四つの分野それぞれに対応する社会人基礎力をカテゴリー化し、それぞれの項目に対しての基準を設けることとする。また、生徒相互による評価を『生徒からの質問の時間』として取り入れ、発表者に他の生徒が質問できるような時間を設定する。個々の生徒のキャリア発達の状況を的確に捉えるには、《スパイラルアップ・PDCA サイクル》P (plan : 計画), D (Do : 遂行・行動) C (Check : 評価), A (Action : 反映・補正行動) のサイクル (循環) 評価による継続的な学習が不可欠であり、この評価が生徒のキャリアに繋がるものとした。

#### 「関心・意欲・態度」に関する評価基準

- ① 働きかけ力 (アクション) 自分の生育歴や将来像に関連した記事を選ぶことができていますか。
- ② 自律性 自分の発表の授業時間に、課題を忘れずにまた出席しているか。
- ③ 聴力・柔軟性・ストレスコントロール力 他者の意見をしっかりと聴いていられるか。自己のストレスを他の生徒への協力を求める事で解決することが出来たか。生徒からの質問や疑問を取り入れ、これを相互評価の機会とする。

#### 「思考・判断・表現」に関する評価基準

- ④ 計画力・創造性 (シンキング) 問題解決に向けて自らが可能な諸手段や具体的方法を提唱できているか。
- ⑤ 状況把握力 他者が自分の意見をどのように聴いているかに注意が向けられたか。

#### 「技能」に関する評価基準

- ⑥ 発信力 (チームワーク) 適切な声量、わかりやすく発表できているか。特に沈黙の時間を作らない努力。

#### 「知識・理解」に関する評価基準

- ⑦ 問題発見力 (シンキング) 問題や事件の本質や原因を理解しようと努めているか。
- ⑧ 主体性 授業担当者の解説を頼りに理解を深めることが出来たか。  
※ 評価項目に対して、全てを1～4の段階において評価した後に総合的に判断する。  
(1. まったくあてはまらない 2. 少し当てはまる 3. 当てはまる 4. とても当てはまる)

### (4)《PDCA サイクル》P(plan:計画), D(Do:遂行・行動)C(Check :評価), A(Action:反映・補正行動)のサイクル(循環)による授業担当者と生徒の評価。

スパイラルアップによる評価は、生徒の発達の段階をより細かく捉えるために用いるが、その際、授業担当者のスパイラルアップもより重要なスキルとして求められる。特に、処理としての「共通キーワード」の提唱は、生徒の発語活動を知識の定着に繋げるという教育活動において、授業担当者が自らを評価するものとしても位置づけ、自己のスキルアップに繋げたい。

#### 自ら学習する時間のスパイラルアップ

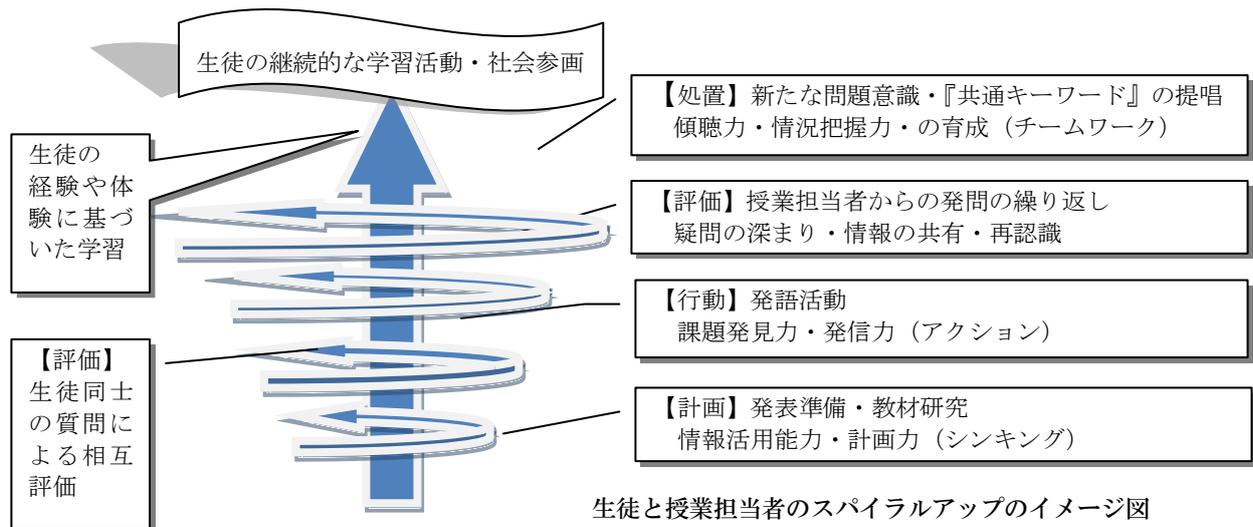
- 【計画】 自らの発表行動に必要な情報を収集し、何をどの様に発表するかを計画する。
- 【行動】 実際に全員の前に出て発語活動をとまなう発表をする。
- 【評価】 授業担当者からの質問に答えることにより、自己の知識理解度等を評価する。また、他の生徒からの質問を受けることにより、発表者のみでなく他の生徒を巻き込んだ相互評価が行われる。
- 【処理】 授業担当者による客観的な検証により、新たな問題意識を深める。

### 対話型授業の実践における生徒のスパイラルアップ

- 【計画】 授業運営上で用いる発問の設定と研究 △展開される単元毎に適した発問を精選する。生徒の身近な問題・授業単元とのつながり・授業担当者が認識している知識などを発問作成上の留意点とする。
- 【行動】 発語環境の整備 △上記の発問時の留意点に注意しながら、発語環境を整える。
- 【評価】 社会参画に関する意欲を向上させる評価 △発語活動の意欲を高めるために、稚拙な意見も否定せずに丁寧に取り上げる。
- 【反映】 探究心を向上させる補正行動としての授業担当者のフォローアップ △生徒の意見を尊重し他の生徒との共通理解を図るため、担当者からの意見を必ず付け加える。

### 授業担当者のスキルアップ

- 【計画】 生徒が発表する記事や社会問題に対して、常に教材研究に努めなければならない。
- 【行動】 自らの体験や価値観を生徒に積極的に話す事、適した質問を瞬時に判断し発問する。
- 【評価】 生徒の評価は観点別のものでなく、より多面的に判断する。
- 【処理】 「共通キーワード」を提唱する事により新たな問題提唱を行う。生徒同士、また生徒と授業担当者の相互関係の中に、社会情勢や多くの問題点を取り上げる事によって、個の問題ではなく全体（公民）としての問題意識を持たせることが出来る。



### (5)生徒が自己の経験に基づきながら学習する時間のような授業運営の可能性

公民科の授業運営においては、すべての範囲においてこの授業方法を導入できる可能性がある。個々の学習単元に適した発問を設定することに教材研究の基礎基盤が位置づけられる。この基礎基盤が明確であれば、生徒の学習作業そのものの方向性も明確なものに繋がる。展開する学習内容と生徒の経験を、どのような視点から捉え関連付けるかに工夫が必要である。授業担当者が、常に自分自身の経験や体験に関連付けることによって学習単元を解説するように努めることによって生徒の経験と授業担当者の経験に対する思いがシンクロナイズする機会が生まれる。こうした共有的・共感的理解を有した瞬間に絶えず注意を払い、その積み重ねによって、多くの発問事例を研究し遂行することが可能となる。実際に単元毎に用いた発問事例は次のようなものである。

#### △学習単元・▼導入的発問・▲本質的発問

△国家と法▼最近受けた注意▲日本の知っている法律 △国際分業と貿易▼訪れてみたい国とその理由▲使っている外国製品 △現代社会の諸問題・農業と食糧問題▼好きな食べ物は▲食糧自給率を上げる方法 △基本的人権の保障▼日本国にしてほしいこと▲最低限度の生活ってどんな生活 △経済とは何か▼正当な高校生のお小遣い▲経済主体の役割 △財政の仕組みとはたらき▼無駄そうな公共施設▲取めている税金はどんな種類があるか △新しい人権▼中学と高校の違い▲表現の自由とブログの書き込み △国民の義務と責任▼スカートの丈を短くしてはいけない理由▲納税・勤労・教育を受けさせる義務 △地方自治▼将来住みたいところ▲住民自治の本旨とは何か △大きな政府と小さな政府▼日本のいいところ▲夜警国家と福祉国家の違い △経済摩擦と外交▼大原高校と近隣高校の違い▲世界に誇れる日本製品 △民主主義思想の展開▼日課に掃除がある理由▲人間の自然状態とは △公共の福祉▼高校生の茶髪はいいのか▲社会共同による利益は何か △租税と税制の問題▼消費税率の5%は高いか▲間接税と直接税の違い △社会保障制度▼日本の足りないもの▲国民皆保険と年金問題 △公害防止と環境保全▼校内で汚れているところ▲使っているリユース・リサイクル商品 など

## 7 おわりに

対話型授業と発表学習の実践は、生徒の発達の段階に応じたキャリア教育のスパイラルアップに繋がり、具体的な目的とした「社会人基礎力の向上」に近づく事が出来たかということに関しては、前述したアンケート結果と下記の生徒のアンケートから検証できる。人間関係形成能力には言語活動が不可欠であり、公民科のような教科だからこそ導入しやすい対話型授業が生徒に不足しているこの能力の育成に適していると思われた。文部科学省の提唱する「キャリア教育を教科・科目の指導方法に導入する」事を、この授業研究から少しは実践できたのではないと思う。

対話型授業を経験する事とは、その中に自らを置く事がすなわち社会参画そのものである。毎時の授業実践が、発達の段階に応じたキャリア教育の場であるならば、その意味において常に全員が参画できる授業を運営することを目標としなければならない。「自らの経験や体験に基づいて学習する時間」を設けることによって、生徒は個々の経験と体験の中から学習活動に参加することが容易にでき、さらには、教師と生徒・生徒と生徒のような多様な関わり合いを深めながら社会参画の意欲を高めることが出来たのではないだろうか。

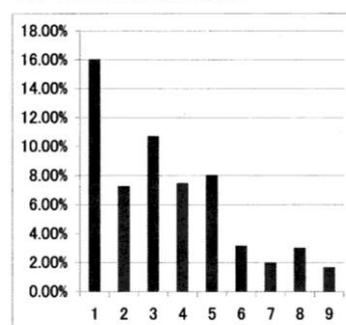
### 生徒の感想や意見

▲一人一人に意見を聞くのはこれから卒業してから「自分の意見を言うこと」はとても大切なことだと思うので、今のうちからトレーニングをすることができ、良いと思っています。▲新聞発表が始まり、順番が来るのがとても嫌でした。しかし、皆の前で発表してみても、自分にとって自信も少しですがついたと思います。その新聞記事が広がっていき先生のお話もとてもためになった。▲授業中に意見を発表するときは、上手く答えが見つからず黙ってしまったこともありました。自分の中で意見を考えるのはとても難しいです。でも、そうやって自分で考える力がつくだと思ひ、質問される時はいつも必死に考えていました。▲授業の時に必ず先生が聞く質問で一年生の時は「わかりません」ですましてきたことが多かったけど、政経の授業を受けてからは前より答えられるようになりました。▲自分は人の前で話すことが苦手で、上手くしゃべれなかったけど、政治経済でたくさん話すようになったので、人前でも普通に話すことができるようになりました。大人と話すことが多くなったので、就職の面接なども上手くやることができました。▲毎時間一人一回は、自分の意見を言っているから、初めのころに比べたら自分の意見を持つことができるようになりました。▲発表する力が足りない私たちは、この機会によって発表するのに緊張感が少し減ってきたと実感しています。笑いながら授業が出来る、考える力がつけられる、そして将来のことを考えられる力が身に付けられ、本当によかったです。『おれ合い』『けじめ』という二つについては、政経の授業を選ばなければ、考えることもできなかつたと思っています。▲四月の頃に比べると、ニュースや携帯のニュースも少し興味を持って見られるようになりました。▲授業は楽しいです。だから、どんなに眠くても聞いています。▲楽しかった。話に興味をわいて気づくと授業が終わっていた。▲友達の発表を聞いて、世の中の動きをわかりやすく理解できてとてもいいと思いました。たくさんさんの発表の場があるから、いろんな意見があつて面白いです。 【表現は生徒の原文のまま】

### 【授業実践とキャリア育成の比較】

本校の過去9年間卒業生の就職希望者の動向を検証したところ、対話型授業実践を取り入れた4年前から未決定者の割合が急激に減少している。授業の実践が一概にこの要因であるとは言えないが、上記の生徒の感想や意見を集約すると生徒のキャリア育成に授業におけるスパイラルアップが関係していると思われる。「自分の意見を持ち、他者に伝える能力」がコミュニケーション能力であり、公民的資質に不可欠な能力を育成することが、キャリアアップに繋がるものといえる。その意味においても、今回の研究が今日直面している多くの諸問題の解決の糸口になれば幸いと考へている。

進学以外の未決定者の変化



(平成13年度～平成21年度)